

丑年二拂

一 銀百五十拾目

但し半口

六番座江

新 蔵

寅五月十五日

一 三百拾五勿

但し壱口三拾目

二年二拂
一 銀百五十拾目

但し半口

六番座
新 蔵

寅五月十五日

一 三百拾五勿

但し壱口三拾目

【表紙写真解説】

鶴見町の昔の漁業のうち、特色のある、異色の漁業に突ん棒つぎぼう漁業がある。この漁法は海面に浮上するカジキを手投げモリで仕留める勇壮なものである。

この漁業は、大分県では明治三十四年（一八七〇—七二）ごろから始められたといわれ、臼杵市の風成・板知屋両地区や津久見市の保戸島に長さ七・五メートルの突ん棒船があり、豊後水道一帯で操業していた。明治一七年には、臼杵の中津浦の板井五三郎が、カジキ・マグロを棒の先につけたモリでつく、突ん棒漁法

を考案した。

表紙写真は戦後昭和二七年ごろ種子島沖で活躍している大島の突ん棒漁船、第25八幡丸の勇姿である。当時、東中浦地区に七隻の突ん棒漁船が操業しており、その技術は卓越していたという。

また、すべて個人経営で、漁船も一〇トから一九トの小型船であった。しかし、昭和四〇年ごろには漁船の規模も一〇—三〇ト級が七隻（梶寄）、三〇—一〇〇トが三隻（丹賀）と、鶴見町には一〇隻の突ん棒漁船が操業していた。同四〇年代末には町から突ん棒漁業は姿を消した（『鶴見町誌』）。